

審査の結果の要旨

氏名 金 憲奎

本論文は、朝鮮王朝が 1392 年の朝鮮王朝の建国から 1910 年に日本によって植民地化されて滅びるまでの約 500 年間を研究対象とし、韓国における地方都市の原型として知られている「邑治」の歴史を系統的に分析し、「邑治」の成立とその変容過程を究明することを目的としたものである。現在韓国の都市には 20 世紀以前の古い都市住宅、商業施設などがほとんど残っていないことから、本研究は主に朝鮮時代に編纂された地理志や邑誌などの文献史料を利用し考察を行った。これらの史料は、簡単に言えば、国家の地理統計資料とも言うべきもので、広範囲にわたり各都市の歴史を記録しており、多くの情報を提供してくれるという点で韓国の都市史研究において大変貴重な史料である。ところが、これらの史料は漢籍であるため従来の韓国の建築史、また都市史の多くの研究では、ごく一部だけが利用されていた。

本論文はこれらの全国地理志や個別邑誌をはじめとして、朝鮮時代に編纂された多くの 1 次史料を綿密に分析したことが注目すべき特徴である。特に各々時代が異なる複数の全国地理志を分析し、各時代におけるマクロな視点による特徴を解明した上で、個別邑誌や個人の著述などを用いてミクロな視座からの分析で補充し、個別の都市・建築をより広い視野で解明することができたという点で評価できる。

本論に入り第 3 章では、朝鮮朝の建国後に行われた改革の際に「邑治」に建設した諸施設を分析した。そして朝鮮朝の「邑治」は、「都城」と同様の構成原理にもとづいてつくった「都城の縮小版」であったことを実証的に解明している。そして当時の「邑治」には官庁・教育施設など周辺の郷村とは異なる機能の建築が中央の権力を示す権威建築として設置され、周辺の郷村地域とは異なる建築とそれによる景観が生じたことを究明した。このような「邑治」と「郷村」の機能と景観の差異の深化は「邑治」で「都市化」が始まったことを意味し、韓国の都市史において大きな転換点であったことを実証的に解明した。

そして、このような成果により 15 世紀にほぼ完成した「邑治」の諸施設の都市的機能や地方統治における支配構造を解明し、その関係を図式化することができた。これによって、代表的な郷村地域の施設である「書院」が持つ都市史的意味を究明することができた。朝鮮時代において大きな意味を持つ儒教建築である「書院」は「邑治」から離れていたことから一般的には「邑治」とは全く関係のない施設として知られていた。しかしながら、「書

院」の建設によって「邑治」はその中心性が弱まり、これが朝鮮朝の建国以来進んでいた「邑治」の都市化を鈍化させたもっとも大きな原因であったことを究明したのは今までのない大変興味深い観点でありまた研究成果である。

第4章では主に城郭を中心として「邑治」の防御機能について分析を行っている。さまざまな種類の城郭を機能や使用法などに基づいて類型化し、類型ごとの城郭の分布状況とその変化を分析し朝鮮朝が持っていた防衛体制を解明した。そしてそれによって今まで多くの研究者によって朝鮮朝の地方都市を表す基準として扱われていた「邑城」が持つ意味を、必ずあるべき施設として認識されていた「都城」とは異なる系譜であったことを究明したのは非常に注目される研究成果である。

さらに16世紀以降朝鮮半島で発生したさまざまな戦争によって「邑治」の防御機能に対する見直しが生じ、既存の「邑治」の防御施設の整備のみならず新たな都市類型を生んだことを究明したことができたのは朝鮮の都市史研究において大きな意味を持つ研究成果であろう。そして現在ユネスコの世界文化遺産に登録されている「水原華城」の築城の理由が、王権と臣権の対立構造の中で「南漢山城」という「山城型軍事都市」を通じて軍事的・経済的権力を握っていた「老論」を抑えるためであったことを明らかにしたのは、都市を単体ではなくより広い範囲から分析した本論文の独特な研究方法によってこそ解明できたといえよう。

第5章では、新たな都市類型が生まれた中で都市を維持するための経済的基盤として「商業地」を設置していることに注目し、商業活動と「邑治」との関係について分析を行っている。朝鮮朝において都城での商業建築についてはすでに多くの研究成果が出ておりよく知られていたが、地方郡縣での商業建築についてはほとんど知られていなかった。そんな中で朝鮮初期に一部の地方郡縣に「肆」という商業建築があったことを明らかにしたのは大きな研究成果であろう。

そして地方郡縣において政治・軍事の中心であった「邑治」に商業機能が加えられその中心性がより強化されていった反面、既存の「邑治」とは離れた場所で交通の要地を中心として商業が盛んになり新たな「商業地」が形成され徐々に広がっていたことを明らかにした。そして19世紀以降につくられた「開港場」と鉄道などが既存の「邑治」から離れてつくられたことによって「邑治」とは別に大きなまちが形成されたのは、「邑治」が徐々に発展していったのとは別に、「商業地」が地方郡縣の都市史における新たな系譜として成長したことを明らかにしたのは大きな研究成果であろう。

以上のように本論文は韓国における地方都市の原型として知られている「邑治」が朝鮮初期の地方制度改革によって地域・規模などに関係なく、儒教的秩序体系という同一の概念によって体系化され成り立っていたことを解明した。

以上のように本論文は、都市史的観点にもとづいて「邑治」に対する包括的で体系的な考察を行い、1392年の朝鮮王朝の建国から1910年日本によって植民地化され滅びるまでの約500年間を研究対象とし、「邑治」の歴史を系統的に分析し、「邑治」の成立と変容過程を究明することができた。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。